

東晋次著『退職老人の日本語教育―日中協同教育in天津―』

溝上由紀

本書は、三重大学教授をつとめた著者が、退職後に単身で中国に渡り、天津師範大学において担った、足かけ八年にわたる日本語教育指導の貴重な記録であるとともに、著者の異文化理解の実践記録でもある。著者は中国古代史が専門で、漢文は読み慣れている一方で、現代中国語会話はやや不自由する状態で中国に渡ったということであるが、本書の中で描写される、労をいとわない日本語教育の授業実践の様子や、中国人学生たちとの心温まる交流の光景から伝わってくるのは、使命感を持って中国の若者に日本語を教えようと努める強い決意と、敬意を持って中国人や中国文化を理解しようとする努める真摯な態度である。

評者は日ごろ大学で語学教育（英語）に携わっており、中国にも日本語教育にもかかわる機会はほとんど持たないが、

著者の日本語教育にむける熱意を前に、自らの語学教師としてのあり方や授業のやり方を、襟を正して見つめなおさずにはいられなかった。著者の異文化理解や日本語教育の実践は、真の国際人としての心の持ちようの手本を示し、（問題の多い）日本の英語教育政策にまでも重要な知見を与えてくれるものであると考える。評者にとっては、中国文化について、また天津という町についても初めて知ることが多く、楽しい知的刺激も与えてもらった。さらに言えば、退職後の第二の人生の活き活きとした過ごし方の見本としても参考になるところが大きい。

本書は、全六章（二七二頁）からなっている。評者が携わる分野である英語教育や異文化コミュニケーションなどの観点に引きつけた所感を交えながら、各章の内容を順に紹介し

ていくことにしたい。

第一章「天津赴任へ」では、三重大と天津師範大学が国際的協同教育を行うことになり、著者が天津に赴任するに至るまでの経緯が述べられる。少子化の中、各大学は経営努力を強いられているが、それは二〇〇四年四月に法人化された国立大学も例外ではない。質の高い教育プロジェクトに交付される補助金を得るため、二〇〇四年、三重大では天津師範大学内に、日本語教員養成コースを開設し、両大学でそのコースの協同教育を実施するプログラムを計画、著者は同僚に請われてその代表者に就任し、それが著者とこのプログラムの長いかわりの始まりとなる。そして三重大内での調整や中国側との交渉など紆余曲折を経て、二〇〇六年九月、ついに両大学の協同教育協定が締結され、天津師範大においてこのコースの一期生が入学するに至った。プログラムの教育内容は、天津師範大の一年生二〇名の学生が、三年次前期までの二年半で天津において主に日本語を習得し、三年次の後期から三重大へ一年間留学する。そこで日本語関係科目の単位修得と、天津師範大に提出する卒業論文の指導を三重大教員の下で受け、四年次後期に天津師範大へ復帰し教育実習

を行うとともに卒論を提出し天津師範大を卒業する。その後学生は再び三重大に留学し、さらに一年かけて三重大卒業に必要な単位を修得し、三重大に提出する卒業論文を制作し卒業する。このように五年かけて、学生は天津師範大と三重大で二つの学位（ダブルディグリー）を取得するというものだ。ところで協定では、三重大から常時、教員二名を天津に派遣し日本語教育を行う約束になっていたが、この約束が三重大側の大きなネックとなったことが述べられる。在外研究などで欧米にはすすんで赴任する教員は多くとも、中国に行くことには抵抗感を示す教員が多く、人員確保が難航したということである。そのこともあつたのだろう、著者は二〇〇九年三月に三重大を早期退職し、同年四月から天津への長期派遣員としての道を選ぶことになる。さらにこの協定の運用の問題点として、三重大の学生も天津師範大に留学し、二つの大学の学位を取得することができるシステムが作られたにもかかわらず、日本の学生や保護者の中国嫌悪もあり、双方のダブルディグリー制度が実質的には実現しなかったことが挙げられている。著者が挙げる上記のような状況は、多くの日本人に根強い欧米中心主義志向と、そのコインの裏表としてのアジア軽視が、このようなプログラムの理想的な履行を

不可能にしてしまう現実を物語る。しかしこの協同教育のよ
うな日中交流が、この現状を少しずつでも変え、相互理解を
一歩一歩進めてくれることだろうと信じた。

第二章「天津という都市」では、九か国による租界によつ
て分割されていた歴史を持つゆえに中国とは思えないエキゾ
チックな雰囲気を漂わせる大都市天津の街並み、レストラン、
名物などが紹介されたり、著者が住んでいた賓館（ホテル）
のことや食生活が描かれたりして、天津観光案内としても
楽しめる。そして床屋との心温まる交流のエピソードや、
太極拳を習ったり野球チームに入ったりして現地の中国人や
日本人と触れ合う様子からは、天津での単身生活の日常を積
極的に楽しもうとする著者の人柄がうかがえる。

第三章「八里台老人の日本語指導」は、本書の中核となる
章であり、最も多くの紙幅を割いて天津師範大の八里台キャ
ンパスで著者が携わった日本語教育が回想される。日本の英
語教育の文脈においては、教師はネイティブスピーカーが良
いという一般通念が根強いが、その言語の母語話者ならば誰
でも美しい発音でその言語が正しく使えて、簡単に良い語学

教師になれるのか。語学教育に携わったことがある者なら多
くが「否」と答えるのではないかと評者は推察する。言語教
育の専門家には、その言語の文法や語彙の用法を明示的に説
明する能力が求められるのだが、その能力は母語話者だから
といつて自然に備わっているわけではないからだ。実は天津
に行く前の著者は、日本人が日本語を教えるのだからそれほ
ど苦勞はないのではないかと樂觀視していたそうだが、いざ
教鞭をとってみたらそれは「あさはかな考え（八六頁）」
だったと述べる。もともと日本語教育の専門家ではなかった
著者にとつて、日本語教育の実践は当初は苦勞と試行錯誤の
連続であつたことだろうと察せられる。

師範大では、日本語基礎の授業は中国人の日本語教師が中
国語で語法を説明しながら担当するため、著者は主に「聴解」
の授業を担当した。中国人大学生の授業態度は極めて真剣で、
私語は一切せず、日本語を何とか習得したいという切実な気
持ちをみなぎらせており、著者は学生たちの健気さに打たれ、
この学生たちのためであれば、という気持ちで日々熱心に授
業準備や学生の回答用紙に朱入れする作業に没頭する。時に
は徹夜になることがあつても、準備や授業が嫌だと思つたこ
とはないと断言する姿勢は、この協同教育をなんとしても成

功させたいという著者の責任感や決意の強さを物語る。

学生の集中力や関心を高めるために、著者は教科書に基づいた授業にアクセントをつけようとさまざまな工夫を凝らす。数詞を覚えるためにビンゴゲームをさせたり、日本の歌謡曲、たとえば小田和正の「風のように歌が流れている」の歌詞を聴き取らせ、歌の中で表現されている恋がどのようなものだと想像するかを自由に日本語で書かせてみたりする。歌詞についての解釈を書かせるというこのアクティヴィティは、学生の作文能力や想像力を確かめるための興味深い授業実践例として、評者の英語の授業でも参考にしたいところである（ただし、学生の英語能力が高くないと実践はきびしそうだ）。高学年の、三重大留学直前の学生には、聴解の練習として、三重大で行っていた著者の専門科目の講義を再現することを試みたそうで、これは学生にとっては留学先での授業のイメージを掴むのに役立つことであろう。著者はまた、茶道などの日本の伝統文化を実演付きで紹介したり、結婚に伴う改姓などの日本の社会制度について説明したりしながら、聴解練習にとどまらない、日本語の背景や日本人のものの考え方の指導も実践する。外国語教育は言語の語彙や用法などの実用面の教授だけにとどまるものではなく、その言

語と抱き合わせになっている文化や価値観の教育を包含するものであり、語学教師の役割は、新しい言語を通じて学生がもつ既存の価値観を相対化させ、新しい価値観への理解を促すことであると評者は考えるが、著者の上記のような教育実践は中国人学生の自文化の相対化と日本理解を大いに助けることとなったであろう。

著者の日本語教育への熱意は上記のような、学生が身を乗り出して参加しそうな授業の実践にとどまらない。著者は学生への宿題のため、また学生の自主学習に役立ててもらうために、さまざまな種類のテキストを年月をかけて手作りする。中国人学習者が行き詰まりやすい日本漢字の音を習得させるための『総合漢字練習帳』をはじめ、日本の国語教科書から収集した文章集、日本の童話や昔話を収録したテキストなど、学生の手も借りながら一字一字パソコンに入力し、奥様による朗読までつけたテキストを何種類も編集するという、著者のこの教育にかける情熱、そして学生のために日本の書籍や映像資料を収集し著者の授業準備室を図書館のように充実させ、授業後に書架に集まってくる学生に多忙な手を休めてにこやかにアドバイスしたり指導したりする無私の思いやりは、本書中に出てくる中国人学生の言葉を借りるな

ら、まさに「国境や民族を超えた教師の責任感（八五頁）」を体現するものである。二〇一四年に、中国における外国人教員の顕著な教育活動に対して贈られる「榮譽証書」を、著者が「国際人材交流」という雑誌社と「中国国際人材交流与開発研究会」という団体から贈られたことは、著者の人格と教育哲学が中国人学生たちの心をいかに深く打ったかを雄弁に物語るエピソードだといえるだろう。

外国語の習得について著者は、外国語を楽しみながらマスターできる簡便な方法はなく、どこかの段階で地獄の苦しみを乗り越えなければならぬのではないかと述べているが、評者も同じ考えである。英語に関していえば、英語と日本語の言語間距離が遠いため、日本語話者が、中級程度の英語を習得するのに必要な学習時間は、一般に三千時間から四千時間とされており、習得するためには、一定期間、相当に集中して学ぶ必要があるとされる。そしてその学びの過程は、決して楽しいものではなく、当然ではあるが苦しい努力や忍耐を伴うものだ。天津師範大の日本語の授業は一・二年生ともに週に八コマ以上が設定され、一つの学期は一八週から成り、かなり授業時間が多い。その予習復習や宿題に加え、学生たちは、音読を中心とした自主学習にも熱心に取り組む。その

ような並々ならぬ努力を重ね、三重大留学前の二年ほどの短い期間で日本語能力試験一級に合格する優秀な学生もいるという。近年の日本では、経済界や英語産業などの思惑を反映した、英語教育は早期から始めるべきであるとの意見が優勢となり（評者はそれに批判的であるのだが）、二〇二〇年度から実施される学習指導要領で、小学五・六年生で英語が教科として必修化されようとしているところであるが、この師範大の学生たちの日本語習得の実践例は、日本語を習得したいという強い動機づけと決意、質の高い指導、そして一定期間の集中した学習と努力により、高いレベルの外国語習得は大人になってからでも十分可能であることを示唆し、早期英語教育推進の方向に大きく傾いている日本の英語教育の議論に一石を投じることができるとは思えないかと評者は考える。

第四章「中国の大学教育と学生」では、日本の場合と同様に、かつてはエリートの養成機関だったが、二一世紀に入る前ごろから急速に大衆化した中国の大学の教育事情や、大学生気質が描かれる。中国の大学では、教科書に厳密に沿った講義が行われ、学生は通常ノートを取らないということ、学部教育では、日本の大学で行われるようなゼミ形式の討論の

授業は行われず、専攻分野に必要な知識を講義形式で伝授するのが通常だということなど、著者が現場で観察した中国と日本の大学教育の相違は興味深い。

中国では教師は尊敬される存在であるのだが、中国人教師と比べ、日本人教師は優しい（「甘い」と大学生には思われているようである。そのせいもあつてか、著者は中国大学生のカンニング行為に辟易させられる。一部の学生は模擬試験でまで不正したり、他の学生の宿題を丸写しして提出したり、果ては間違つても構わないと何度言い聞かせても、授業中の教師の質問に対して正答をこっそり見ながら答えたりするので。著者は数年の観察ののち、これらの不正行為は、学生がクラスのメンバーや先生、親などに対する自己の面子を保持するために行っているにちがいないとの見解に至る。著者は中国における面子という文化の複雑さに一定の理解を示しながらも、この「ずるさ」に対しては批判的である。

ところで著者が描写した中国人気質の一面、人前では自分の権利を貪欲なまでに自己主張し、自分の責任が問われるようなことが出来たとき、あくまでも自分が悪いのではなく、他の誰かの責任と強く言い張る、その一方、自分および親しい人たち以外の人間には無関心でその行動も気にな

い、という部分は、評者が英国留学時代に観察した英国人気質ともとても似ているとひそかに思ったのであつた。

第五章「老人の親た中国」では、著者が親たり感じたりした中国と日本の両国の文化の相違が描かれる。著者は、日本人の対人関係が「情理的」「察しの文化」であるのと異なり、中国人の対人関係は「合理的」「自己要求の文化」であると述べ、自己主張が強いとされる欧米人の行動様式と中国は似た文化様態なのではないかと述べる（これは、評者が第四章の紹介の最後に述べた見立てとも共通する）。中国では、あくまでも自分はいかにかくしたい、これこれのことを知りた、と積極的に要求しなければ相手から必要なレスポンスや情報が引き出せないということを、中国で生活しながら著者は悟っていく。それは、職務上の情報は黙つていても与えられてきた日本での恵まれた職場環境とは大いに異なるものだと痛感したという。

著者によると、日本人には中国人は無愛想で礼儀知らずに見えるかもしれないそうだ。例えば、ある人に食事をごちそうになったとき、日本人なら次回にその人に会った際に再度お礼を言うのが普通だが、中国人はそのようなことは通常し

ないという。このことに最初は違和感を持った著者も、中国で暮らし、中国人を観察するうちに、後日またお礼を言ったりするとそのサービスをもう一度要求していると誤解される、あるいは、後日またお礼を言うなんて友達じゃない、というような感覚を中国人は持っているからそのような行動をとるのではないかという考えにいたる。また頼まれて他の大学などへの推薦状を書いたような場合も、その結果がどうなったかということについて、後で本人からお礼や報告があることはほとんどないという。しかし著者は、推薦状を書く

と承諾した人間＝著者は、承諾した以上、推薦状を書くという行為により著者自身の責任を果たしたということであり、結果がどうなったかということは推薦状を書いた人間には責任のあることではないから、結果は知らなくてよい、というのが中国人の考え方なのではないかと推察し、中国人のこのような行動に理解を示す。この他にも日本人とは大きく異なる中国人の行動の例をいくつも挙げながら、著者はそれを批判するのではなく、中国人の行動の根元にある思考様式や文化を冷静に分析し、解釈している。その描写からは、日本の中で日本人として形成してきた自身の準拠枠を柔軟に変化させながら、安易に中国が良いとか、日本が良いとかという偏

値判断を下すことなしに、興味と敬意を持って相手を理解しようと努め、文化的差異を楽しむことさえしようとしている著者の態度が垣間見える。

第六章「おわりに」では、中国人にとって日本人はどのように見られているのかということについての著者の推察が述べられる。二〇一三年ごろ、ある学生が作文で、著者の指導の丁寧さに感心したので、今までの日本人観を改めなければならぬと思った、と書いてきたそうである。著者は、日本人への見方を改めなければ、という部分にこの学生の本音が出ているとみて、中国人一般は言うまでもなく、著者の学生たちも、日本人とつきあう機会はあまりない上、歴史教育やマスコミ報道などの影響もあり、否定的日本人観から全く自由な人は多くないのではないかと述べる。中国古代史を専門とし、中国文明の偉大さや日本文化の原基としての中国文化に敬意を抱いている著者は、かつて日本が中国を侵略したという歴史的事実により、中国人の人々に対して相済まないという気持ちを中心に持っており、それゆえ友好的で寛容な態度をもって中国人に接し、理解しようと心がけてそれを実践する。たとえば、二〇一二年ごろに天津の小間物屋で土産

を探していたら、その店の店長から「日本人には売らない」と断固とした調子で言われたそうだが、著者はその店長に対して怒りや恨みを感じるどころか、その人の親族の誰かが日本人に殺されたり傷つけられたりして日本人を憎いと思っているのかもしれない、と相手の心情に思いをよせ、相手の言動に理解を示し、静かにその店を後にする。

現在でも日中の両国間には、歴史認識や尖閣諸島、靖国問題などをめぐって火種は多く、日本と中国の完全に友好的な共存の実現は容易ではないだろう。評者は、異文化理解、異文化への寛容というのは、相手を無条件に受け入れるやさしさということではなく、受け入れるのが難しいほど異なっている相手を拒否するのではなくその存在を認め、ときには相手と話した末お互いに完全に分かり合うのは不可能だということを発見しさえしたり、ときには自分のこれまでの慣れ親しんだ準拠枠を解体して再構築しなければならぬような、自己変革という痛みを伴う交流経験をしたりした後に行きつく、相手を尊重しながらあえて困難な共存の道を探るという境地なのであろうと考える。相手の文化や発想を敬意を持って理解しようと努め、相手の行為に対する寛容な気持ちを持つこと、このような態度を持つ著者のような国際人同士

の交流が、異なった文化間の相互理解をこれまでも進めてきたし、これからも進めていくのであろう。天津師範大以外の中国の複数の大学からも協同教育の実施の要望が三重大に寄せられているようで、三重大と天津師範大との国際協同教育において著者が中国に蒔いた日中相互理解の種は、今後も着実に育っていくことが期待できそうである。以上、所感を交えながら全章の要約を試みてきたが、評者の力不足ゆえ著者の論点を完全に把握しきれない部分もあるかもしれない。それらの部分に関しては、それこそ著者の寛容を乞いたい次第である。

最後に、評者が個人的にもう少し知りたかった観点について記すことを許していただきたい。それは、多くの中国人にとっての日本のイメージが決して良くないと思われる中、この日中協同教育プログラムの学生たちのように、強い学習意欲を持って日本語を専攻するのは、どのような動機づけや目的をもつ学生たちなのだろうかという素朴な疑問である。学生たちが日本語を学習するのは、日本で就職したい、あるいは中国の日系企業に就職したいなどの希望があり、日本語を身につけると、就職上のメリットが大きいからという実利的

な動機づけによるケースがやはり大半なのだろうか。もちろんそれはそれで理解できるが、たとえば、はじめはそのような道具的な動機づけが強かったが、著者のような理想的な日本人教師とかかわっているうちに、いわゆる内発的動機づけ（「日本や日本文化が好きになり、日本語を学ぶこと自体に喜びを感じるような、学習効果が上がりがやすい動機づけ」が強くなってきたというような、学習する過程で動機づけに変化があつた学生も、あるいはいたのではないだろうか。日本語や日本文化について深く学び、卒業後は日本企業へ就職したり日本語教師になるなど、日本とのかかわりを今後ずっと持つていく可能性が高い道を選択した中国人学生たちの、日本語学習への動機づけやその変化の様相について、（学生の英語学習へのやる気はどうしたら高められるのかと悩んでいる）評者は、大層な関心があるのだ。

白帝社、二〇一七年九月、二七一頁

（みぞかみ ゆき 名城大学法学部教授）

